

「世俗化」の観点から論じた[大塚 2004: 421–422]。これは、法の「変容」と人の「変容」をパラレルに見すえた議論である。「変容」のインタラクティブな性質にいつそう注目することで、人と法との相互変容という論点も開けてくるはずである。

次に、「変容」が画するものについて。本書を通読して気づくのは、前近代と近代を分かつ画期として「西洋の圧力」ないし「西洋の衝撃」を強調している点である。たしかに、本書の冒頭には、「本書は、シャリーア(あるいはイスラーム)を、イスラーム護教論的な立場で理想化することも、オリエンタリスト的な立場で否定することも意図していない」(4頁)とあり、また本評の冒頭でも紹介したように「歴史的に考察すること」(3頁)の重要性についても注意を促している。ところが、本書の終盤近くになって、「近代以前であれば、現金ワクフや利息さえもシャリーア体系の枠内で説明できていた自己完結性が、ヨーロッパの近代法体系との邂逅によって大きくゆらいだ」(99頁)などという記述に出くわしてしまうと、はたして本書の入り口と出口のあいだで認識の整合性がとれているのだろうかというところまでいって禁じえない。シャリーアが〈前近代=柔軟=多面的〉な性格から〈近代=硬直=一元的〉な性格に「変容」したとする本書の二項対立的な議論の組み立て方も、こうした認識の問題に深くかかわっているのではなかろうか。

ところで、本書の刊行後、イスラーム法史の時代区分として「近代」(19世紀)に断絶を想定する既存の研究(本書もそれに連なる)のあり方を批判して、遅くとも16世紀までには国家によるシャリーアへの介入が本格化し、そこにイスラーム法史を画する大変動が生じたとする研究が現れた[Burak 2015: esp. 220–223]。たしかに、「近代」に生じたイスラーム法の「変容」が重要であることは、著者らが本書で明示したとおりである。とはいえ、前記の新しい研究動向は、「変容」を1回限りの出来事とせず、また「近代」だけに生じた事象ともせず、歴史のなかで大小の波をとまなしにしながら変動していく一つのプロセスとして捉えることの重要性を提起する。二分法的・二項対立的な歴史理解および歴史叙述を相対化する一つの契機としても、この点は今後でいねいに検証すべき論点となるはずである。

以上、本書を読んで思いつくままに評価すべき点、また課題とすべき点を書き連ねてみた。ほかにもシャリーア研究の方向性を見極めるための大きなヒントが、本書にはいくつも潜んでいるにちがいない。この意味でも、今後の研究の確かな出発点となる本書の刊行を重ねて喜びたい。

<参考文献>

- 大河原知樹・堀井聡江・磯貝健一(編) 2011. 『オスマン民法典(メジェッレ) 研究序説』 NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東洋文庫拠点。
 大塚和夫 2004. 「イスラーム世界と世俗化をめぐる一試論」『宗教研究』 78 (2): 401–426.
 Burak, Guy. 2015. *The Second Formation of Islamic Law: The Hanafi School in the Early Modern Ottoman Empire*. New York: Cambridge University Press.

(佐々木 紳 成蹊大学文学部助教)

坂本勉『イスタンブル交易圏とイラン——世界経済における近代中東の交易ネットワーク』慶應義塾大学出版会 2015年 v+388頁

序章によれば本書の目的は、オスマン帝国の首都イスタンブルを拠点にイランまでつながっていた交易ネットワークを、19世紀以降の西洋資本主義経済が主導するグローバル経済の中に位置付けながら、その自律的な変容を捉えることである。そして本書の主張は、近世からイスタンブル交易圏の中で培われてきた商人たちのネットワークは、近代以降の西欧経済の拡大に対して自律的な解体・再編を経ることで、交易圏の変容をもたらしたというものである。この主張を裏付ける各章の内容を以下にまとめる。

第1章「イスタンブルの中継貿易とイラン」では、19世紀初頭以降の西欧工業品の流入に対応した商人たちの活動が、現地ペルシア語史料や統計を駆使して明らかにされる。1830年代以降、イスタンブルから黒海を経由してイギリス綿工業品がイランに流入するようになり、その中継貿易を担ったのは現地の商業や

市況に精通したオスマン帝国の非ムスリム商人やイラン商人たちであった。当初はイスタンブルの非ムスリム商人がイラン商人に綿製品を売り渡すという仲介取引が機能したが、19世紀後半になると非ムスリム商人たちはイランの都市に支店を置き、イラン商人を排した綿製品の流通ネットワークを構築した。この非ムスリム商人の進出の背景として、1860年代以降、オスマン帝国の中継関税の引き下げによって、彼らはイラン商人よりも1～3%は低い関税率を享受できたことが指摘される。しかし、1880年代末からはロシアの綿工業の発展によるイラン北部からの綿製品輸入が拡大し、それは1890年代以降の民族紛争の混乱とも相まって、従来のイスタンブルを中継する交易ネットワークの解体を招来したのであった。

第2章「イランのアルメニア系商人の交易ネットワークとイスタンブル」では、アルメニア系商人による西欧とイランの間の交易活動の一端が示される。1880年代に起こった商人一族の遺産相続をめぐる裁判資料の分析から、イギリスに拠点を置いたアルメニア系商人がイスタンブルの代理人や弁護士と密に連絡を取り合い、さらにはイラン向け商品の中継地であったトラブゾンの商人とも強固な人脈を有していた様子が提示される。ここからは、イギリスからイスタンブルを経由してイランにまで伸びたアルメニア系商人のネットワークの一端を垣間見ることができる。さらに本章で強調されるのは、イギリスの貿易拡大によって中東地域が世界経済に取り込まれていく中で、新たに生じた商業機会をとらえて、逆にイギリスにまで進出していったほど現地の商人たちも躍動していたという事実である。

第3章「イランの絹貿易とオスマン帝国のギリシア系非ムスリム商人」は、1860年代に微粒子病によって崩壊したイランの絹貿易が、1890年代以降にいかんして回復したのかを論じる。前述のようにイランの絹貿易が衰退の中で、オスマン帝国の非ムスリム商人たちは日本から蚕種を導入するなど対策を講じたが、その輸出回復にはつながらず、その後1890年代初頭まで絹貿易は低迷を続けた。1890年代に入ると、イランではギリシア系非ムスリム商人がオスマン帝国から蚕種を持ち込み、そこから育てた繭を輸出するようになる。この時期のイランの絹貿易は、その生糸の品質が西欧市場で求められる水準に達しなかったこともあり、未加工品の繭の形態での輸出が主体であった。他方で、繭に輸出の主役を奪われた生糸は国内市場に供給され、伝統的な絹織物の原料糸として利用された。イランの絹貿易の発展からは、単に商品の流通を担うだけでなく、その生産過程にも積極的に関与した現地の商人たちの変化への対応力が看取される。

第4章「イランにおけるカーペット・ブームとイスタンブルの中継貿易」は、19世紀後半以降の西欧におけるカーペット・ブームの中で、イランの絨毯が商品的価値を見出され主要輸出品となっていった状況を論じる。1860年代に壊滅的な打撃を受けたイランの生糸輸出に変わり、1870年代から絨毯の輸出が増加した。この背景には、19世紀後半以降の経済発展の中で西欧諸国の大衆の購買力が向上し、奢侈品としての絨毯に対する需要が高まったことがあった。イランから西欧への絨毯輸出に先鞭をつけたのはマンチェスターに拠点を置くツィーグラー商会であり、1870年代初頭には絨毯産地ソルターナーバードに自らの絨毯工場を設立し、生産部門にも従事し始めた。その後、ホッツ商会といった他業者も絨毯生産に乗り出し、激しい競争の中でイランの絨毯輸出は規模を拡大させた。その中で、イラン人商人による絨毯生産も交易都市タブリーズを中心に興隆し、それら絨毯の多くはイスタンブルを経由して西欧やアメリカに再輸出されていた。

第5章「イランのタバコ・ボイコット運動とイスタンブル」では、イランにおけるタバコ・ボイコット運動がもたらした経済的な帰結について、国際的な商品流通網の視角から考察される。イラン産タバコの商品としての特徴は、水タバコ用として主にオスマン帝国に輸出されていた点にあった。1890年代初頭、イラン政府が外国資本のペルシア帝国タバコ専売会社へタバコ専売権を与えると、これに対してイラン全土で抗議活動が展開された。その結果、タバコ専売権は全廃されたが、一方でイスタンブルにトンベキ(イラン産タバコ)専売会社が設置されていたため、イランからオスマン帝国向けのタバコ輸出はその会社の独占状態にあった。これに対抗して、イラン人商人たちはイスファハーンを拠点としたタバコ輸出会社の設立を進め、タバコの販売・輸出の独占を目指した。しかしこのイスファハーンの会社を介さずにタバコを輸出する商人もあらわれ、その輸出独占は失敗に終わった。以上のようにタバコ・ボイコット運動を経済的側面から再考したことで、イランにとどまらないオスマン帝国との間の国際的な商人活動の変化が示された。

終章「変容するイスタンブル交易圏」では、第一次大戦後のトルコ共和国の建国の過程で、非ムスリム商人に変わりトルコ系商人が台頭したことが示される。1908年に起こった青年トルコ人革命を契機として、オスマン帝国政府は自由主義から保護主義へと経済政策を転換し、非ムスリム商人を排してトルコ系の商人

を優遇するようになった。こうした国民経済の観念が経済政策を牽引し始めた中で、イスタンブルの非ムスリム商人たちは国外への移住を余儀なくされた。しかし、1920年代以降もトルコにおける非ムスリム商人たちの経済力は維持され、トルコ系商人たちも彼らの協力を得ながら事業を発展させたという側面があった。第二次大戦後には、トルコ政府は輸入代替工業化を目指し、その中で多くのトルコ人商人たちが民間企業を立ち上げた。そしてイスタンブルにおける綿紡績業を中心とした工業化においても、戦前から綿製品の流通に関与してきた非ムスリム商人の協力があつたとされる。

本書はイスタンブルを中心に黒海沿岸を経由してイランにつながる交易圏を舞台に、商人たちの活動が西欧資本主義経済との接触の中で、いかに自律的な変化を遂げたのかを明らかにしている。各章で分析される西欧から輸入された綿製品、他方のイランから輸出された絹、タバコ、そして絨毯といった商品のイスタンブルとイラン諸都市の間のローカル交易は、現地の言語や市場に関する経験・知識を蓄積してきた在地の商人たちが主導し、そこに西欧商人は容易に参入できなかった。しかも一部の現地商人たちはイギリスに進出し自ら綿製品を輸入したというように、単なる受動的な反応にとどまらない積極性も見せたのであった。こうして、在来商人たちの活動は旧来の蓄積にすぎだけの静的なものではなく、西欧進出の中でもたらされた新たな制度や技術をいかに利用し、自らの商売を有益にするかという試行錯誤の連続であったことも本書では開示されている。個別の商品流通に焦点を当てた各章の内容を総括すると、19世紀のイスタンブル交易圏では新たな経済環境の変化に対し、現地の商人たちが主体的に自らの活動を変容させたことが示されたといえる。

最後に評者から一つの問題提起をしたい。本書ではイスタンブルを中心とした交易ネットワークの強靱性と自律的な変容については詳述されたが、我々はさらにその地域経済の発展にまで自律性を見出すことはできるだろうか。この問いに関しては、流通だけでなく生産から消費まで含めた経済活動全体が考察対象となる。いうまでもなく、19世紀の西洋資本主義経済の拡大の原動力は工業化であり、中東地域も含めたアジアは工業国向けの一次産品生産・輸出を拡大することで国際分業体制の中に深く統合されていった。本書の事例でいえば綿工業品の輸入と生糸・繭の輸出による交易関係がそれに当たる。この観点からは、西洋の工業化があってこそアジアの一次産品輸出が成長し、さらにその経済活動が西欧を中心とした国際市場の価格変動に左右されたならば、それらアジアの「周辺地域」は西欧経済に従属したという位置づけを余儀なくされる。これは本書の序章で批判される、近代世界システム論の見方に当たるだろう。つまりは、個々人の経済活動の考察からは自律的な主体の躍動が見えてくる一方で、それら活動の舞台となった市場が、西洋主導の制度やシステムの影響力からどれほど自由であったのかという点が、さらなる問題として立ち上がってくるのである。西洋中心の世界経済史を相対化するためには、この問題にまで迫る必要があるといえるだろう。実は、本書の分析の一つであるタバコの流通からは、この点についての洞察を得ることができる。1880年代のイランからオスマン帝国への輸出の中でタバコは最重要商品であり、その流通は両地域間の分業関係に基づいた。こうした地域内の局地的な商品流通の中にこそ、西欧商人の進出を阻む現地の商人活動の持続性の源泉があつたのではないか。そしてタバコに限らず現地の生活文化にかかわる多種多様な商品の市場構造を核として、域内の生産と消費の連動による地域経済の自律性が培われた可能性はないだろうか。さらには、その自律的な地域経済のシステムが、20世紀には政治主導の中で国民経済の枠組みに収斂しながらも、本書終章で論じられた民間資本と内需主導のトルコの工業化に貢献したという歴史は描きうるだろうか。以上のように本書の意義は、徹底した史料精査から交易ネットワークの実態を描き出したことだけでなく、地域経済に関する問題に迫りうる視座を提示した点にもあるといえるだろう。

(小林 篤史 日本学術振興会特別研究員(PD)・政策研究大学院大学客員研究員)

高岡豊・溝淵正季(訳・解説)『ヒズブッラー——抵抗と革命の思想』現代思潮新社 2015年 229頁

翻訳は多大な労力を要する。にもかかわらず、日本の学界では研究論文や研究書と比較して業績としての評価がそれほど高いとは言えない。労力の割には評価されにくい仕事なのだ。とはいえ、翻訳は非常に重要